

『伊勢物語』を教材とした「見方・考え方」を鍛える授業 ～高等学校新学習指導要領を見据えた実践～

著者	安國 宏紀
雑誌名	日本文学文化
号	19
ページ	1(68)-11(58)
発行年	2019
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012252/

『伊勢物語』を教材とした「見方・考え方」を鍛える授業

～高等学校新学習指導要領を見据えた実践～

安 國 宏 紀

はじめに

高等学校の現場においては、2022年度から年次進行で実施される「新学習指導要領」（以下、「新要領」）に関する議論が活発になってきている。今改訂をめぐっては、特に国語科についての大きな変更が注目されており、今後3年間の移行期間で、各研究機関や学校現場から様々な実践報告がなされ、実施に向けた知見が集積されていくことが期待されている。

本稿では2018年度第1学期に高校3年生を対象として実施した「古典B」の授業実践を通して、今改訂のポイントとも言われる、教科の特質に応じた「見方・考え方」を鍛える授業のあり様とその教育効果について探ってきたい。

1 新学習指導要領における「見方・考え方」

新要領を理解するためのポイントは「主体的・対話的で深い学び」（「総則」3頁）、「資質・能力」（「総則」4頁）、そして「見方・考え方」（「総則」17頁）の3点の把握にあると見られている。本稿では、その中でも特に「見方・考え方」に注目してみたい。以下、新要領「総則」の「第3款 教育課程の実施と学習評価」から該当箇所を引用する。

各教科・科目等の指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

（1）第1款の3の（1）から（3）までに示すことが偏りなく実現されるよう、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。

特に各教科・科目等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を発揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科・科目等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）が鍛えられていくことに留意し、生徒が各教科・科目等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

これによれば、「見方・考え方」とは「各教科・科目等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」のことである。では、国語科の特質とは何か。新要領における国語

科の6科目（「現代の国語」「言語文化」「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」）について、新要領における扱われ方を「1 目標」「2 内容」「3 内容の取扱い」の記述を比較することで確認したい。

【「現代の国語」「論理国語」「国語表現」】

- ・「1 目標」に、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」という記述があるが、その他に「見方・考え方」という言葉は無い。

【「言語文化」】

- ・「1 目標」に、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」という記述がある。
- ・「2 内容」の「思考力、判断力、表現力等」に関わる「B 読むこと」の指導について「イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。」「オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。」という記述がある。
- ・「3 内容の取扱い」の古典の教材に対する配慮の項目に「（イ）人間、社会、自然などに対する様々な時代の人々のものの見方、感じ方、考え方について理解を深めるのに役立つこと。」という記述がある。

【「文学国語」】

- ・「1 目標」に、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」という記述がある。
- ・「2 内容」の「知識及び技能」に関わる我が国の言語文化の指導に関する項目に「イ 人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。」という記述がある。
- ・「2 内容」の「思考力、判断力、表現力等」に関わる「B 読むこと」の指導について「カ 作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めること。」「キ 設定した題材に関連する複数の作品などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること。」という記述がある。

【「古典探究」】

- ・「1 目標」に、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」という記述がある。また、この科目にのみ「1 目標」に「（2）論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通した先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思い

や考えを広げたり深めたりすることができるようにする。」という記述が付されている。

- ・「2 内容」の「知識及び技能」に関わる我が国の言語文化の指導に関する項目に「エ 先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。」という記述がある。
- ・「2 内容」の「思考力、判断力、表現力等」に関わる「A 読むこと」の指導について「カ 古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。」「キ 関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること。」という記述がある。

以上のように整理すると、「現代の国語」「論理国語」「国語表現」の3科目が「1 目標」で「言葉による見方・考え方を働かせ」と言及するだけであるのに対し、「言語文化」「文学国語」「古典探究」の3科目では「1 目標」の記述に加え、「2 内容」や「3 内容の取扱い」でも「ものの見方、感じ方、考え方」という表現で「見方・考え方」に言及していることがわかる。こうした記述の偏在からみて、新要領が国語科の中で「見方・考え方」を育むために中心的な役割を果たすと想定している科目は、「言語文化」「文学国語」「古典探究」の3科目であると考えるのが妥当であろう。

ここで、これらの3科目が、いずれも文学的な要素の強い科目であることに気づかされる。「見方・考え方」を深めることと、文学的な内容に触れることはどのように関係するのだろうか。以下に、奈須正裕の指摘を引用したい。

各教科カリキュラムでは、学問・科学・芸術がその永年の営みの成果として積み上げてきた膨大な知識・技能・価値の体系を、子供たちが正確に継承し、自力で発展させられるようになることを目指します。もちろんそれは、各文化遺産に属する個別的知識を表層的に理解し、あるいは羅列的に記憶することと同義ではありません。さらに、各親学問に固有なものの「見方・考え方」と、それを達成する認識なり表現の方法を身に付け、自在に活用できるようにする必要があります。（中略＝安國）教科を学ぶとは単に知識の量が増えるだけでなく、知識の構造化のありようが、その教科の親学問が持つ固有な構造に近似していくよう組み変わり、洗練されていくことなのです。（中略＝安國）したがって系統指導だからこそ、学習者である子供が現在所有している既有知識や既有経験を足場に、それを教科の系統に沿ったものへと修正・洗練・統合していくような授業づくりを進める必要があります。いわゆる「アクティブ・ラーニングの視点」「主体的・対話的で深い学び」の実現も、まさにそのことを示しています。

奈須は、各教科の学びの本質とは「その教科の親学問」に接近することであり、「親学問」のもつ体系の中に教科教育を位置づけることによって、その教科に固有なものの「見方・考え方」を育むことができると指摘している。国語の場合であれば、高等

学校国語科における現代文・古文・漢文の授業と、その「親学問」である高等教育における日本文学、日本語学、中国文学等の専門領域とを近づけていくことが、国語科の特質に迫るための手掛かりになると考えることができるだろう。

新要領が「見方・考え方」を育むために中心的な役割を果たすと想定している科目は、そろって文学的な性格の強い3科目であった。このことから、国語科の特質を高等教育の文学研究に求めるという方向性は妥当性があるように思われる。ただし、教育論は理論的にいかに妥当性があったところで、実際の学校現場の実践の中にこれを落とし込むことができれば意味をなさない。次章からは、実践のためにどのような配慮が必要であるかを検討していきたい。

2 教材としての『伊勢物語』

学校現場において国語科の特質に迫る授業を展開していこうとすると、その障害となることが想定されるのが教科書の存在である。特に古典分野においては教科書「教材」と文学「作品」との差異を実感させられることが多い。具体的には、近代文学の定番教材である「羅生門」「山月記」「舞姫」等が教科書においても全文掲載されているのに対し、古典となると『竹取物語』にしても『源氏物語』にしても、著名な部分であったり、教えやすい分量がまとまっていたり、教えるべき文法事項がまとまって出てきたりしている部分が意図的に切り取られているという状況を想起してもらえばわかりやすいだろう。しかもこれらには「竹取の翁」や「光源氏の誕生」といった便宜的なタイトルが、あたかも最初から作品についていたかのように付され、しばしば生徒を混乱させている。

中等教育の教科書に掲載されている古典教材は、そのほとんどすべてが様々な意図によって作品の一部を断ち切り、教える側の都合の良ように編纂し直したものである。これはまさに、高等教育で文学研究を志す者が、その学問の最初に厳に慎むよう指導される「文学作品の文章の一部を持ち来って自己の目的のために勝手な物言いをする²⁾こと」の最たるものではないか。こうした文学の扱い方は、国語科とその「親学問」を近づけようとする際に、本質的な制約となり得るものであろう。

新要領への対応を目指す教科書がこうした問題点をどのように克服していくかに期待したいが、現状として、古典分野において「教科の特質」に迫る授業を展開するためには、自主教材を用いる必要があるだろう。その際に意識したいことは、やはり本文の部分的な切り取りに陥らないことである。しかし、数年かけて一つの作品に取り組むといった授業が許される学校は限られている。カリキュラム・マネジメントの観点から、大学受験への対応といった観点からも、程よい塩梅の作品を取り扱わなければならないのが現場の現実である。

こうした実際の³⁾現場の要求に応え得る作品はないか。一例としてあげたいのが『伊勢物語』である。杉山英昭は、『伊勢物語』が教材化される際に一つひとつの章段が分断されてしまうことに触れて、次のように指摘している。

『伊勢物語』と銘打って教材化しながら、一章段を採用した場合に一つの説話のような教材化の態度がうかがわれるのは、いかがなものかと考えないわけにはいかない。しかしながら、教科書の編纂者の立場からすると、『伊勢物語』だけにスペースを割くわけにはいかないということを主張するであろうから、『伊勢物語』の文学としての本質を学習者が意識することが大切だと考えるならば、学習活動の場で、「二条后関係章段」(三段・四段・五段・六段)をまとめさせたり、「東下り章段」(七段～十五段)をまとめて学習させることを構想しなくてはならないであろう。そのようにして、教科書に採用されている章段がたとえ一章段であったとしても、学習活動の指導構想いかにによって『伊勢物語』の文学としての本質に触れることが可能であると考ええる。

杉山の指摘するように、「二条后関係章段」や「東下り章段」程度のまとまりであれば、授業担当者の裁量によって扱い方を工夫することで、より文学に接近した授業が可能になってくるであろう。また、『伊勢物語』第9段が標準的な教材として高校1年生レベルの教材として教科書に採用され続けている実績からみて、生徒への負担や評価の観点についても、適当なレベルの授業に落ち着けることができるという見通しが立てられる。

3 授業の実践～『伊勢物語』注釈をつくろう～

以上のような新要領の「見方・考え方」についての捉え方と、古典教材としての『伊勢物語』の可能性を踏まえ、新要領移行後の「言語文化」「文学国語」「古典探究」の授業のあり方を想定しながら現行指導要領における「古典B」の授業として実施したのが、以下にあげる『伊勢物語』注釈をつくろう⁴⁾である。

1 単元名 『伊勢物語』注釈をつくろう						
2 単元の目標 <ul style="list-style-type: none">・古典作品の精読を通し、幅広いものの見方、感じ方、考え方を養う。・古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。・古典を読んで、その内容を構成や展開、背景からの確に捉える力を養う。						
3 取り上げる言語活動と教材 <ul style="list-style-type: none">(1) 言語活動 『伊勢物語』注釈をつくり、発表による深めあいをする事。(2) 教材 『伊勢物語』第1段～第14段						
4 対象 高等学校3年生（文系4クラス、男子生徒118名）						
5 単元の具体的な評価基準						
<table><tr><th>関心・意欲・態度</th><th>読む能力</th><th>知識・理解</th></tr><tr><td>古典の本文を、細かな表現や語句の使い方に着目して積極的に読解しようとしている。</td><td>古典を、その作品の背景や複数の章段ごとの繋がりなどに注目して幅広い視野で読んでいく。</td><td>古典作品の奥深さに気づき、その読解がものの見方・考え方を広げるものであることを理解している。</td></tr></table>	関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解	古典の本文を、細かな表現や語句の使い方に着目して積極的に読解しようとしている。	古典を、その作品の背景や複数の章段ごとの繋がりなどに注目して幅広い視野で読んでいく。	古典作品の奥深さに気づき、その読解がものの見方・考え方を広げるものであることを理解している。
関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解				
古典の本文を、細かな表現や語句の使い方に着目して積極的に読解しようとしている。	古典を、その作品の背景や複数の章段ごとの繋がりなどに注目して幅広い視野で読んでいく。	古典作品の奥深さに気づき、その読解がものの見方・考え方を広げるものであることを理解している。				

6 単元の指導計画

次	学習活動	指導上の留意点
1次	<ul style="list-style-type: none"> ・先行研究である『伊勢物語』の注釈書を見て、今後の作業内容を確認する。 ・大きな辞書の使い方についてのレクチャーを受け、実際に手に取ってその引き方を確認する。 ・自分が担当する章段を決定する。(二人で一章段を担当する) 	<ul style="list-style-type: none"> ・底本を指定する。(小学館『新編日本古典文学全集』)を使用。 ・『日本国語大辞典』『古語大辞典』『和歌大辞典』『国史大辞典』等を使用。 ・本授業の到達点および評価基準を明確に伝達する。
2次 ～ 8次	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が担当する部分について、「本文」「語釈」「現代語訳」「内容と問題点」を調査する。 ・調査内容を踏まえ、「ロイロノート・スクール」を使用してスライドを作成し、発表の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ章段を担当している生徒同士が協力・分担して調査を進められるよう促す。 ・先行研究を手掛かりとすることはよいが、丸写しにすることがないように指導する。 ・発表に向けて、スライドが他者に伝わりやすいものになるよう工夫させる。
9次 ～ 12次	<ul style="list-style-type: none"> ・発表者は電子黒板にスライドを映しながら調査結果を発表する。(一人5分) ・発表を聞く生徒はループリック評価用紙を用いて発表者に対する評価をつける。 ・発表後には質疑応答の時間を設け、問題点や気づきについての共有を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒同士やり取りの中で自発的な気づきが起るよう促す。 ・語釈や問題点等の発表において、面白い内容の発表があった場合にはピックアップし、全体に確認する。 ・聞く側の態度を意識させる。 ・生徒の発表内容を踏まえるかたちで、複数の段に関連性があることに気づかせる。
13次	<ul style="list-style-type: none"> ・『伊勢物語』の「二条后関係章段」「東下り章段」のまとまりについてのレクチャーを受け、発表全体を振り返る。 ・古典作品の持つ奥深さと、これを理解するための様々な切り口が存在することを知り、他の文学作品への興味を持つきっかけを得る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ものごとを考える際の切り口の重要性を指摘し、広く人生に役立つものの見方・考え方を持つところまで意識させる。

この授業の念頭にあるものは大学におけるゼミナールの授業である。大学の中古文のゼミナールで『伊勢物語』を1章段ずつ学生に担当させ、毎週発表を繰り返していくような授業を高校生向けの授業に落とし込むことを目指している。ただし、対象の高校3年生はいわゆる受験知識的な文法事項と古文単語は学習してきたが、一斉授業以外のかたちの古典の授業を受けた経験がなく、今回のような7校次にも及ぶ多くの時間を生徒の主体的判断で使うかたちの授業を受けた経験もなかった。そのため、今回の授業では、この授業を受けることの意義・主旨の説明を丁寧に言い、生徒が納得した上で活動を実践できるように留意した。

実際に活動する生徒の様子を見ながら、7校次を図書室での個人研究時間として確保し、4校次をプレゼンテーションと質疑応答にあて、協働的で探究的な要素をできる限り多く確保できるようにした。また、生徒自身による活動を中心とし、教員は生徒の疑問に対する手掛かりを提示したり、生徒の頭の中で言葉になりきれない発想を引き出したりするファシリテーターとしての役割に徹することを意識した。

大学の講義との大きな違いは、調査やレジュメ作成の時間を授業内に設けている点と、一つの章段に担当生徒を二人つけ、意見交換や役割分担をすることができる余地をあえて設けている点である。役割を分担することを可とすることは、意欲・関心にばらつきがある生徒たちを対象とする際、授業に参加しない生徒や落ちこぼれを防止するために不可欠であると思われる。また、こうした配慮は生徒同士の意見交換を生むという点でも作用し、授業をアクティブにすることにも繋がった。

4 授業の振り返り

⁽⁵⁾この授業の実施校は全校生徒が一人一台iPadを所有し、それを文房具として授業に利活用することを推進するICT先進校である。生徒たちには、調査した内容について授業支援アプリの「ロイロノートSCHOOL」を用いてレジュメを作成させ、⁽⁶⁾【写真1】のように発表の際にはそれを電子黒板に映しながらプレゼンテーションを実施した。ロイロノートで作成したレジュメはアプリ内での生徒間共有を可としたため、他の生徒の優秀な発表を参考にして自身のレジュメを作り直す生徒もあり、生徒間の高め合いが活発に実施されていた。このようなアプリを利用する場合、教員からの指示がなくても、自主的にイラストを用いて説明をはじめる生徒が一定数出てくるが、【写真2】のように本授業においてもイラストを用いて本文に対する自身の解釈を説明する生徒が現れた。イラストの使用や、他生徒のレジュメを参考にした自身のレジュメの改善等は、大学の講義内ではほとんど見られない新たな古典注釈への向き合い方がうかがわれた部分であったと思われる。

【写真3】のように、図書室における調査研究の時間には『日本国語大辞典』等の大型の辞書に触れさせた。多くの高校生にとっては初めての体験となったが、高校生向けの文法書や大学受験参考書の類、あるいはWeb検索では体得することができない言語に対する深い理解と関心を育むことに繋がる活動となった。その際、司書教諭

と協力して『日本国語大辞典』を複数セット用意した。辞書を引く順番を待つことによる生徒の活動の停滞が防止されたことによって、大型の辞書を自分の手で引く経験を全生徒にさせることができた。「語誌」などの記述を参考として、言葉の成り立ち等の発展的な内容についてまで調査・研究を実施した生徒が出てきたことが成果であった。

第9次から第12次までの発表の時間には、当初の目論見通り、「二条后関係章段」や「東下り章段」のまとまりに気づいて発表をしたり、『伊勢物語』の編纂や成立背景等についての調査結果や仮説を発表したりする場面が見られた。従来の『伊勢物語』を扱う授業では触れることがなかった専門的な領域に、生徒が自らの力でたどり着いたものであり、「教科の特質」に迫る主体的な活動が実践されていたといえる。

発表の時間には【資料1】のようなループリック評価表を用い、生徒同士による双方向的な深め合いの時間となるよう促した。

【資料1】「ループリック評価表」

項目	特に優れている	優れている	達成	改善を要する	努力を要する
内容	深く専門的な内容にまで踏み込んでいる。	情報を十分に集め、発展的に広げることが出来ている。	調べるべきすべての事柄について触れられている。	調べるべき事柄に不十分な点が見られる。	調べるべき事柄についてほとんど触れられていない。
準備	専門的な文献や研究等にまで触れることが出来ている。	参考文献や辞書類を活用し、説得力がある資料になっている。	不足なく必要な資料を集め、説明に役立っている。	資料に不十分な点が見られる。	必要な資料が揃えられていない。
発表態度	話し方やプレゼンの方法に十分な工夫が見られる。	聞く側に伝わりやすいように配慮しながら発表している。	他者にわかりやすいように、丁寧に発表している。	聞く側に配慮した説明がなされていない。	内容を伝えようという意識を感じることが出来ない。
質疑応答	自分の意見も混ぜながら、問題を発展的に広げている。	質問をきっかけに、明らかにした問題を深めようとしている。	調査結果を踏まえながら、質問に誠実に応えている。	質問に答えようとはするが、返答をすることが出来ない。	質問に答えようという意志を感じることが出来ない。

【資料2】「ループリック評価表」の全回答の集計結果

項目	特に優れている	優れている	達成	改善を要する	努力を要する
内容	15.3%	37.3%	47.5%	14.4%	2.5%
準備	19.5%	29.7%	57.6%	6.8%	3.3%
発表態度	12.7%	34.7%	61.0%	6.8%	1.7%
質疑応答	11.0%	24.6%	52.5%	23.7%	5.1%

【資料2】のループリック評価表の集計結果からみて、事前の準備をしっかりとこなし、発表にも積極的に取り組んだ生徒が多かった。一方で、調査・研究に比べて、発表や質疑応答に改善点が残る生徒が多かった理由は、これまでの授業において発表や質疑応答の機会が不足していたことによるものであると考えられ、経験と慣れによって数値は改善されるものと推察される。

次に、授業後に実施したアンケート項目と結果を確認したい。

Q1「この授業で自分がやるべきことは理解できていましたか？」

よくわかっていました	わかっていました	あまりわかっていなかった	わかっていなかった
53名	46名	19名	0名

Q2「今回のような古典の授業を受けることの意義が感じられましたか？」

とても意義を感じた	ある程度意義を感じた	それほど意義を感じなかった	まったく意義を感じなかった
87名	28名	3名	0名

Q3「今回の授業は楽しかったですか？ つまらなかったですか？」

とても楽しかった	楽しかった	つまらなかった	とてもつまらなかった
35名	67名	14名	2名

Q4「今回のような古典を深く探究する授業を受けてみたいですか？」

とても受けたい	受けたい	あまり受けたくない	受けたくない
47名	56名	13名	2名

Q5「今回の授業を通して、文学作品全般に対する見方は広がりましたか？」

とても深まった	深まった	あまり深まらなかった	深まらなかった
59名	56名	3名	0名

Q6「今回の授業を通して、世の中の物事全般に対する見方は広がりましたか？」

とても深まった	深まった	あまり深まらなかった	深まらなかった
34名	78名	4名	2名

授業を実施する目的と方法を明確にしたことで、これまでに受けたことがないスタイルの授業であっても、なんとかついていこうという姿勢を見せてくれた生徒が多かったように思われる。また、授業前は今回の授業形式に好意的な印象を抱いていなかった生徒が、実際の注釈作業を体験したことで面白さを感じ、好印象を抱くように変化した例が多かった。そして、Q3やQ4で否定的な意見を寄せていた生徒も、そのほとんどがQ5やQ6では今回の授業を通して文学作品に対する見方は深まると回答していることも注目できる点である。

最後に、「今回の授業を経験しての感想」についての自由記述から、いくつかの回答を紹介したい。

【生徒A】「今回、伊勢物語を調べてみて思ったことは、普段の問題を解くのととは違い、今回のような細かい解釈も古文の世界をイメージするためには必要だということだ。」

【生徒B】「一つ一つの言葉や和歌を深堀りする機会がなかったが、改めてやってみると掘り下げないと出てこない意味や登場人物の気持ちをしっかり把握できたのでよかった。」

【生徒C】「言葉を調べるなかで成り立ちや語源など、辞書を開かないと分からないことも学べて非常にやりがいを感じた。」

【生徒D】「少し読んだだけでは登場人物がどのような人であるのかということがあまり分からなかったが、詳しく読むことでその人のことがよくわかり、どうしてそのような行動をするのかがよくわかったような気がした。」

【生徒E】「今までここまで深く古典に触れたことがなかったのでとてもいい経験になった。受験ではこういう文章をすらすらと読めるようになることも必要だが、受験の後には改めて落ち着いて読む機会を持ちたいと思った。」

自分の手で古典を掘り下げることによって新たに増えてくる世界があることに気づき、そこにやりがいや可能性を見出している記述が見られる。このような回答が対象の生徒からあがってくることは、これまでの古典の授業の中ではなかったことである。

この授業を実施した後、生徒たちの古典の授業に向かう姿勢にも変化が現れた。全体的に授業に取り組む態度が改善されたことだけでなく、授業中の発言にも古文単語の成り立ちや時代背景、和歌に表現された登場人物の心情等に対する興味を示すものが増え、高校の授業では扱わないような専門的な知識について触れることが増えた。また、こうした傾向は同時期に実施された「現代文B」の授業内でも確認することができた。

おわりに

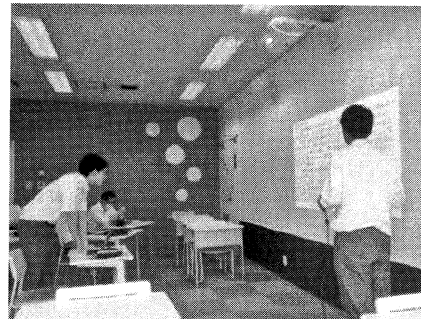
今回実践した授業では、『伊勢物語』の本格的な注釈作業を通して、生徒に国語科の「親学問」である古典文学に接近する経験をさせた。その結果として、文学作品に対する見方を深めるとともに、教科書の枠内に収まらない世の中の物事に対する広い関心と切り口を掴むきっかけを生徒に得させることができたのではないかと考える。

この授業の実施校は私立の中高一貫の男子校であり、実践報告としては少数事例として扱われるものであろう。公立高校や共学校・女子校では生徒のリアクションも変わってくる可能性が高い。また、今回のような調査・研究・発表を軸とする授業は、ICT設備や図書室の蔵書等の授業環境に影響を受けやすい。授業内容と成果の関連性については、今後様々な現場からの事例を検討する余地を残している。だが、今回の実践結果からみて、新要領のいう「各教科・科目等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」を鍛える授業は、その教科の特質・本質に迫るための工夫と部分的な切り取りに陥らない教材への配慮次第では、生徒を大きく成長させる可能性があると言える。

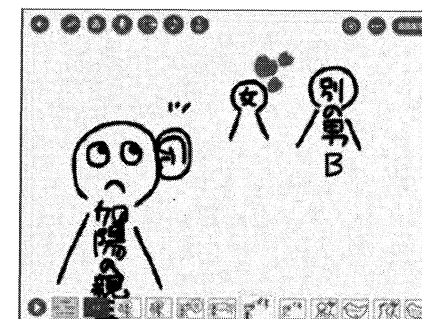
【注】

- (1) 奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』（東洋館出版、2017年）
- (2) 中嶋尚・竹内清己『概説日本文学文化』（おうふう、2001年）
- (3) 杉山英昭『教材としての伊勢物語考』（『國學院雑誌』113巻2号、2012年）
- (4) 現行指導要領「古典B」の「1 目標」にも、「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。」という記述がある。また、「2 内容」にも「古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。」といった記述がある。「古典B」での研究授業の成果は、新要領での「見方・考え方」を鍛える授業のあり様を探るうえでの資料となりやすいと考える。
- (5) 拙稿「教室にiPadがやってきた!」（『日本文学文化』15号、2015年）
- (6) 詳細については「ロイロノートSCHOOL」公式Webサイトの「導入事例」を参照されたい。（https://n.loilo.tv/ja/LNScase_kosei 2019年9月25日、22:00時点）

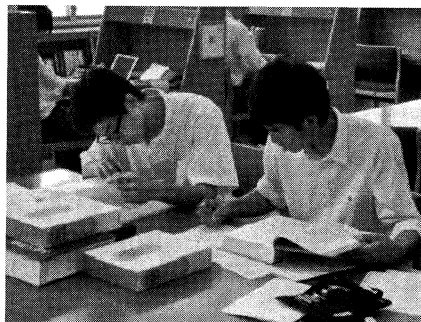
【写真1】電子黒板を利用した質疑応答の様子



【写真2】イラストを用いたレジュメの例



【写真3】『日本国語大辞典』を引く生徒の様子



※写真の掲載については許諾済み。ただし、無断転載は禁ずる。

（校成学園中学・高等学校教諭）